

フォトニュース

第一回市民歩く スキーの集い

写真(上)



一月二十五日、第一回市民歩くスキーの集いが市民の森で行われました。



この歩くスキーの集いは、冬の体力づくりとして自然に親しみながらスキー技術を習得しようというこで行われたもので小学生から七十歳の老人まで約七十人が参加しました。

この歩くスキーの集いは、冬の体力づくりとして自然に親しみながらスキー技術を習得しようというこで行われたもので小学生から七十歳の老人まで約七十人が参加しました。

写真(中)

二月三日は節分、この日は、各地で除厄招福の豆まきが行われました。

花岡幼稚園では、園児たちが先生から「節分と豆まきのお話」を聞いたあと、外に出て雪でつくった大きな鬼のまわりで「鬼はそと、福はうち」と元氣よく豆まきをしました。

写真(下)

二月七日、末広町の宗福寺で一日早い針供養が行われました。この針供養には、市内の和洋裁学校の生徒や仕立屋さん、それに畳屋さんなどふんだん針を使っている人たちが約百人が集まりました。

参加した人たちは、祭壇に供えられたコンニャクに日ごろ使っている針や使い損じた針を刺して供養しました。

われらが町内わがグループ

No. 22

～おらが歌コが春を呼ぶ～

大館民謡研究会

昭和30年代中頃、民謡愛好者数名が市内三の丸の「桂荘」に半ば自然発生的に集まったのが始まりという大館民謡研究会。それから20余年、現在会員の数も50人を超える大所帯になり、その間立石エミ子さんを始め5人も民謡日本一を輩出するなど、郷土民謡界の旗手としてその活躍ぶりにほめざましいものがあります。



同会の例会、いわゆる練習日は毎週月曜の夜で、同会会長を務める嵯峨賢備さんが自分の経営するレストランの奥座敷を開放して行っています。

練習時間はおよそ2時間、ひとつの曲をだいたい1カ月かかって覚えます。講師には本間良藏さんがあたっています。歌唱法はもちろんのこと、歌詞の解釈やその他民謡に関するいろいろな知識をユーモアを混じえて講義してくれませんが子供たちにも大変わかり易いと好評で、民謡が「ますます好きになりました」と会員の声。また練習は主に本間さんの三味線伴奏で口伝えになることから、テープレコーダーを各自持ちこみ録音しておいて、その日のおさらいに役立てています。

ところで同会は、民謡日本一を5人も出していることからもわかる通り、かなり水準が高く、初心者が気軽二民謡を楽しむために入会するにはちょっとためらいそうですが、その辺のところを嵯峨さんは「上・中・初級コースなどを作り、実力に応じて指導するシステムをいざれ作りたいのですが、今のところまだ難しいのが現実。初心者とはとにかく熱心に練習して、一曲づつマスターしていくのが上達の近道」とのこと。

また、郷土芸能につきまものの後継者の育成という問題については「若い人たちに民謡のもつ土の匂いの部分や哀愁、そして逆に歓びといった素晴らしさを膚で感じ取ってもらい、秋田民謡の芽吹きをとだえさせないためにもどしどし参加してほしい」と話してくれました。それでも会員は小学生から中高年齢層まで幅広く職種も会社員、農業、自営業、そして主婦とさまざまで、民謡を支持する層の底辺の広さをうかがえます。

会の年間行事としては市民文化祭をはじめ、市主催各種行事(アメッコ市、夏まつりなど)、そして施設懇談などが挙げられます。個人的に依頼されることもままあるということ。しかし同会は営利を目的としたものではなくあくまでも愛好家の集まり。「お国訛りこそ民謡の真髄。秋田民謡は秋田県人だけにしか歌えないもの。これからも多くの人に民謡の良さを理解してもらうためにがんばりたい」と結んでくれました。

なお、同会入会希望の方は下記へご連絡ください。

☎42-0768 大館民謡研究会

水を考える

-5-

経済の変動に左右される水

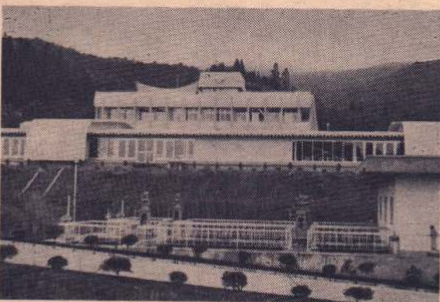
一連の水道施設の建設は、少なく見積もっても完成まで四年から六年の年月を必要とします。したがって、明日に水が必要だからといって、二、三日で施設を造ることはできません。しかも、建設に当たってはまた数年先の水需要を予測して造らなければなりません。

そこで、本市水道の今日までの状況を見てみましょう。

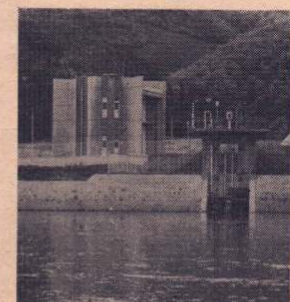
本市水道の給水開始は、大館駅前大火があった昭和三十年十二月に一部給水したのが始まりです。その後、水の需要が増し、昭和四十一年に第一次の拡張事業(最大給水量一万二千二百五十トンの施設)を昭和五十年完成を目標に、六カ年事業で着工しました。

ところが、おかしも本市一帯に高品位の黒鉱ブームが巻き起こり、鉱山従業員の増加で市は活況を呈し、人口も急増の一途をたどり、したがって昭和四十三年にこの一次拡張事業の変更を余儀なくされ、最大給水量一万四千トンに増設し、これが昭和四十七年三月に完成しました。

しかし、昭和四十年代後半からの高度経済成長と地域開発は、水需要の増大へ大きな拍車をかけ、表のとおり昭和四十九年には最大稼働率八六・九%となり、末端の地域や高台



山館浄水場



中山取水場

水道事業は、もともと先行投資を余儀なくせざるを得ない宿命で、ちよほど十年区切りには拡張が必要のようです。しかし、今後の水需要計画を過去の実績値と現在の経済情勢の中から推計しますと、現在の施設能力は今後十数年は給水可能と思われる。

＜別表1 施設の利用状況＞

区 分 年 度	年間配水量 千m ³	1日平均		施設利用率 1日平均 配水量 配水能力 %	最大稼働率 1日最大 配水量 配水能力 %
		配水量 m ³	一日最大 配水量 m ³		
40	1,703	4,665	7,375	97.2	153.6
43	2,513	6,885	9,240	49.2	66.0
46	2,918	7,993	10,800	57.1	77.1
49	3,360	9,206	12,160	65.8	86.9
50	3,710	10,165	12,108	72.6	86.5
53	4,186	11,470	15,820	45.2	62.3
54	4,018	11,150	15,220	43.9	59.9